

被災者の心のケア課題

AMDAの
代表ら帰国

ネパールの現状語る



4月25日にネパール中部を襲った巨大地震の被災地で支援活動をしている国際医療NNGO「AMDA」（北区）の菅波茂・AMDAグループ代表（68）らが帰国し、10日に会見。山崩れで道路が寸断され、支援の入っていない地域があるほか、被災者の心のケアが課題と語った。

会見には4月26日から派遣されていたAMDA職員の大政朋子さん（43）と柴田幸江さん

（37）も出席。大政さんらは現地に到着後、AMDAネパール支部の医師たちと合流し、首都カトマンズから約80キロ離れ、支援が行き届いていないマンハ市に向かった。現地の病院には医師が1人しかおらずパンク状態だったという。AMDAチームは屋外にブルーシートを張って診療にあたった。数時間かけて山越えしてきた被災者もいたという。

AMDAは10日、日本から新たに6人を派遣。海外の支部などからも医師らが現地入りし、カトマンズ周辺の地域で活動している。

菅波代表は「貧しい人たちの頑丈でない家が倒壊の被害に遭っている。家族を失った人も多く、これから心のケアも必要になる」と話

した。
AMDA（086・252・7700）は支援のための寄付を募っている。

【五十嵐朋子】